

愛する土地で
健やかに暮らし続けるための
医療を根付かせたい

鹿児島県は南北に約600キロメートルあり、多彩な地域が存在。28の有人島など離島・へき地も多く、地域医療に関して全国から注目される県でもある。しかし高齢化や過疎などの、社会的な問題と向き合いながら医療に従事する医師はまだ十分に確保されていない。鹿児島の未来を見据えた活動で、自身もへき地医療を行いながら若手医師の育成に尽力する愛甲孝さんに、これからの地域医療を守る、熱き医師たちの育成について話を伺った。

鹿児島県地域医師育成特別顧問（医師）

愛甲 孝さん

Takashi Aikou

医師を目指した

きっかけは？

とくに高尚な理由はありませんが、強いて挙げるなら、義理の兄が外科医で、「カッコイイ」と憧れたこと。手術は治療結果が明確に分かり、自分の性に合っている…と感じたことでしょうか。医学生時代は安保・インターン闘争の真つ盛り。卒業式もなく、医局は封鎖された状態で入局が叶わず、仲間は全国に散っていった学年でした。鹿児島へ戻り、ぶらぶら過ごしていた私に「外科はおもしろいぞ」と声をかけてくださったのが当時、鹿児島大学医学部で指導されていた内山八郎教授。目の前に道が開けたひと言でした。

私は、西郷隆盛先生をことのほか敬愛する一人。彼が掲げた『敬天愛人』の理念を自分らしく解釈し、今日まで努力してきました。そんな私の座右の銘



始良市北山地区の地域医療を支える北山診療所

は「敬天究理」。敬天愛人と自然科学の原点である理を究める、という観点からの私の造語です。外科医の道に立つたとき、誰にも負けない存在感を持つ医師になる、と決心したことを今もよく覚えています。それから半世紀が過ぎようとしています。熱い心を持ち続ける思いがあるのは幸せだと感じています。

鹿児島島の医療の魅力、

問題点は何でしょう

教壇に立っていた鹿児島大学医学部には、全国的にも珍しい、離島やへき地の医療について学ぶ、国際島嶼医療学講座があります。鹿児島は人情味のある土地柄ですが、離島・へき地ではその傾向が強く、患者さんとも距離が近い。それゆえ地域医療を学ぶ最高のフィールドとシステムが揃った魅力的な教育環境といえます。それは私自身、医師として県内各地へ赴いた経験からも感じています。

問題点は、研修の義務化です。大学卒業後に、国が定めた研修を2年間行うのですが、それにより鹿児島ではなく東京や大阪といった都会の病院で研修する医師が増えました。そのため、医師が鹿児島に定着せず、県内の新しい医師数が急激に減少。さらにハードな勤務環境にある診療科医師も少なくな

り、医師の偏りがみられるようになりました。この問題を解決するため、県は全国に先駆けて「地域枠入学制度」を採用。これは成功例として、全国から注目されています。

学生・卒業生に対して

期待することは？

県の医師確保対策の一環として、鹿児島大学医学部に「地域枠入学制度」を導入して10年目。今年度は初めて研修を終えた1期生2人が十島村と肝付町に配置されました。研修医や学生にも言うことですが、自分たちの故郷である鹿児島をよく知り、地域の皆さんや医療関係者から、たくさんのご意見を吸収してほしいと思います。

卒業生のキャリアアップについては、配置された勤務地で働きながら、大病院や県立病院などで計画的に修練もできるシステムを整備。専門性に特化した研修も進行中です。離島・へき地の勤務義務年限の終了後にどのような医師になるかは自由ですが、軸足を鹿児島に置いて成長してもらえたらと思います。地域で学んだ経験を生かして、世界へ羽ばたく若者も出てくるとうれしいですね。

ご自身もへき地医療に従事されています

現在、私は始良市の青雲会病院に勤務し、北山診療所出張診療を行っています。一人暮らしの高齢者のもとへは往診にも行きます。患者さんとの他愛もない会話も治療の一つ。緊急や高度な治療を要する際には、地元の青雲会病院で対応する連携も組まれています。

この地域は山深く、当初はどうしてこんな不便なところで暮らすのか不思議だったのですが、住民の皆さんの地域への愛着や、お互いを支え合う親族以上のコミュニティを目的の当たり前にして納得しました。

「地域枠入学制度や県・大学・医師会などが一体となった地域医療の再生に向けた努力が実りつつありますが、2050年代の超高齢化社会・少子化問題への対応策もまだまだ必要です。学生や若い医師の皆さんには、患者と医療を通じて感動の共有をしてもらいたいと考えています。なぜならそれが、お互いの信頼構築につながるからです。感動を通じて、地域医療が光り輝くことを願っています。



「患者さんとの会話も治療の一つ」と話す愛甲先生